

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	熊本県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	鹿北町立鹿北中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	1	7	14
生徒数	49	66	66	1	182	

研究の概要

1. 研究主題

「確かな学力の向上をめざして」
 ~家庭・地域と連携した態度づくりと、指導・評価の工夫改善を通して~

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・全教科で実施するが、国語、数学、英語に重点を置きながら実施する。
 理由：国語・数学・英語は、小学校と連携しながらの取り組みである。
 国語・数学においては、全学級で少人数指導を、英語においては、全学級でTTによる指導を取り入れているため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 「確かな学力の向上をめざして」 ~家庭・地域と連携した態度づくりと、 個に応じた指導・評価の工夫・改善~</p> <p>研究の見通し(仮説) 様々な学習活動の中で、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導と、 評価の工夫・改善に努め、家庭・地域と連携し、基本的な学習態度の育成 を図るならば、「確かな学力」を持った生徒を育成できるであろう。</p> <p>研究の内容・方法 具体的には4つの研究部で、鹿北町教育研究所の取り組みと連動させな がら研究を進めた。</p> <p>(1) 態度づくり研究部での実践 ア 学習訓練を図るため「生活三原則」、「学習三原則」、「学び方名人 への道」を全教室掲示し、すべての教育活動の中で指導してきた。 イ 鹿北町教育研究所がめざす、発達年齢に応じた「話す力・聞く力 ・書く力・読む力」の育成(これを「態度づくり」と呼んでいる) のために、指導の徹底をはかるように努めた。 ウ 「家庭学習の仕方&ノートのとり方」の作成を行い、配布した。</p> <p>(2) 個に応じた指導研究部での実践 ア 英語と国語でのTTによる指導(英語は全学年・全クラス、国語 は1・2年全クラスで実施)。 イ 少人数による習熟度別指導(数学)を全学年、全クラスで実施。 ウ くり返し指導、補充的指導、発展的指導のあり方を模索中。「幸 の国テスト」(漢字・計算・英単語)を週1回木曜日の朝自習の時 間に実施。事前・事後指導を行うことにより、全員に満点をとる喜 びを味わわせるように努めてきた。</p> <p>(3) 評価研究部での実践 ア 指導と評価の一体化を図る工夫として、 各授業で、「今日のみあて」や「今日のポイント」等のカード を使い、めあてや課題、基礎・基本を明示するようにした。 小テストや単元テストの実施。 自己評価を積極的に取り入れた。</p>
--------	--

- イ 絶対評価のあり方～評価規準、評価基準、評価方法の研究を深めてきた。
- ウ 総合的な学習の時間及び選択教科の評価のあり方の研究を深めてきた。
- エ 通知表の改善や指導要録記入のあり方の研究を行った。
- (4) 家庭・地域との連携研究部での実践
 - ア 家庭・地域での生活状況や学習状況の実態調査と活用に努めた。
 - イ 各種通信の発行、懇談会・講演会等の開催による連携強化をはかった。
 - ウ 「家庭学習の仕方」を活用させての、家庭学習の充実をめざした。

平成
15
年度

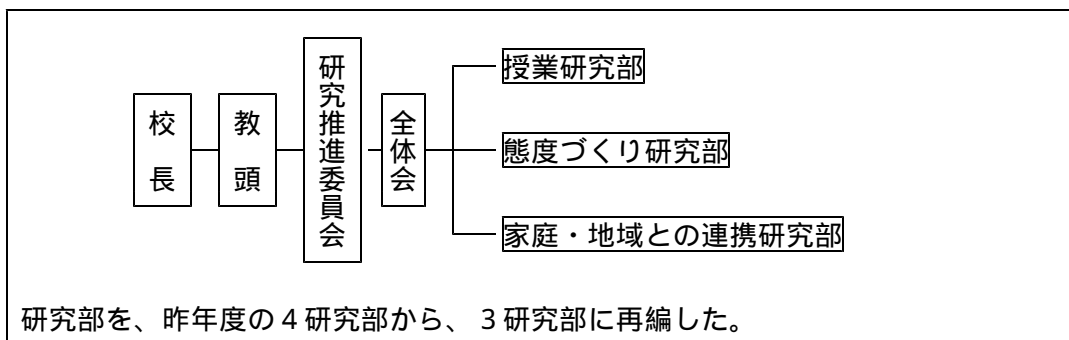
- テーマ
「確かな学力の向上をめざして」
～家庭・地域と連携した態度づくりと、指導・評価の工夫改善を通して～
研究の見通し(仮説)
様々な学習活動の中で、生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな指導と、評価の工夫改善に努め、家庭・地域と連携し、基本的な学習態度の育成を図るならば、「確かな学力」を持った生徒を育成できるであろう。
- 研究の内容・方法
具体的には3つの研究部で、鹿北町教育研究所の取り組みと連動させながら研究を進めた。おもな研究内容は、以下の通りである。各研究部毎に研究内容をまとめた。
- (1) 授業研究部での実践
 - 読み・書き・計算・英単語力の定着を図るための取組
 - ア 幸の国テストの取組
 - (ア) 朝自習時間を利用しての事前指導及びテスト
 - (イ) 選択Aの時間を活用しての習熟度別指導
 - (ウ) 教科担任・学年部で連携しての補充指導
 - (エ) 全員合格を目指しての個別指導
 - 教科の基礎・基本の確実な習得を図るために
 - ア 各教科の基礎・基本の洗い出し
 - (ア) 4観点(5観点)まんべんなく習得させる工夫
 - (イ) 基礎・基本の定着に向けての小中交流会の実施
 - イ 個に応じたきめ細かな授業(指導)の創造とその評価の工夫改善
 - (ア) 少人数授業の創造 全学年全学級の国語と数学
 - (イ) T Tによる授業の創造 全学年全学級の英語、3年社会
 - (ウ) 一斉授業での生徒の実態に応じた指導とその評価の工夫改善
 - ウ 選択B・C・Dで能力の伸長を図る指導と評価の工夫改善
 - (ア) 基礎・基本の定着のための補充指導と評価
 - (イ) 得意な教科のさらなる伸長のための指導と評価
 - エ 研究授業の充実
 - (ア) 全職員1回以上の研究授業(大研、小研の有効活用)
 - (イ) 小中交流授業の実施
 - (2) 態度づくり研究部での実践
 - 学習態度・生活態度の育成のために
 - ア 学級における支持的風土の育成や学び合う集団づくり
 - イ 授業における「学び方名人への道」を活用しての学習態度の育成
 - ウ すべての教育活動における「生活三原則」「学習三原則」を中心に据えた指導
 - (3) 家庭・地域との連携研究部での実践
 - 総合的な学習で各教科の基礎・基本を發揮し、さらに力を伸ばすために
 - ア より学習効果の上がる体験的な学習や問題解決的な学習を模索
 - イ 地域を生かす(鹿北町ならではの取り組み、人材の活用・施設の活用)
 - 家庭・地域・町教育研究所との連携
 - ア 家庭における学習の充実と、好ましい生活習慣の育成
 - イ 地域の教育力の向上に向けての取組
 - (ア) 教育講演会の開催
 - (イ) 学校開放日の充実
 - ウ 小学校・町教育研究所と連携しての学習・生活態度づくり

<p>エ 各種データの収集と分析</p> <p>(昨年度からのおもな変更点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 組織のスリム化と研究の充実をねらい、昨年度の4研究部から、3研究部に変更した。 ・ より高い学習効果を期待し、国語において少人数指導を取り入れた。 ・ 幸の国テストの事後指導の充実を期して、選択授業に組み込んだ。

<p>平成16年度</p>	<p>テーマ</p> <p>「確かな学力の向上をめざして」 ~家庭・地域と連携した態度づくりと、指導・評価の工夫改善を通して~ 研究の見通し 平成15年度と同じ(15年度の実践・評価により新たに設定する) 研究の内容・方法 基本的には平成14年度、15年度の取り組みを継続しながらも、新たな課題を確認しながら内容・方法を工夫する。</p>
---------------	--

* 平成15年度からの新規校については、平成15、16年度の計画について記入すること。

(3) 研究推進体制

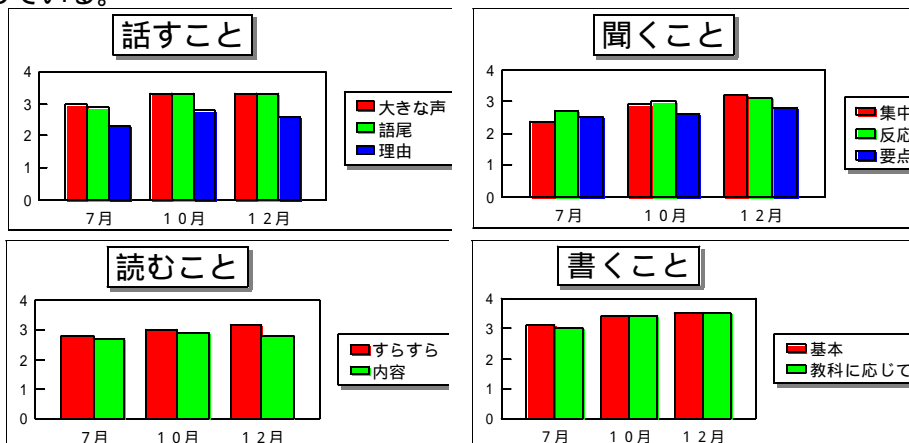


平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

<p>1 授業研究部の取組について</p> <p>(1) 読み・書き・計算・英単語力の定着を図る「幸の国テスト」の取組 出題範囲と出題内容(テスト問題)を事前に配布することにより、生徒が計画的に取り組めるようになった。 事後指導・再テストに選択Aの時間を活用するなど、システムを変更したことで、全職員で取り組む体制と、ややゆとりをもった指導ができるようになった。</p> <p>(2) 教科の基礎・基本の確実な取得を図るための取組 基礎・基本を明らかにすることで、授業の焦点化が図られてきた。 生徒から、「ポイントがはっきりするのでどこを覚えたらいいのかわかりやすい。」「小テストで毎回満点を目指している。」などの声を聞くようになった。 少人数指導においては、生徒から「説明がわかりやすい」「授業に集中できる」「自分の力に応じて選べる」「発表しやすい」「質問しやすい」「自分の力を試すことができる」などの声が聞かれ、また、教師からも「個別指導がしやすい」「全員が確実に問題を解くようになった」などの声が聞かれ、生徒側も教師側も有効な指導法だと感じている。 TTによる指導の場合、共同授業のため指導法に関するアイデアが豊富になり、指導法に変化がある。また、教材の準備も手分けしてできるので能率的にできる。週1回程度の打ち合わせではあるが、話し合う機会がもてるため、授業の評価・反省と改善策について考えることができ、共通実践がしやすい。遅れがちな生徒への個別指導が単独授業に比べて容易にできる。 小テストや単元テストの結果や自己評価より、生徒自身が授業への取り組み状況や学習内容の理解度を認識でき、生徒自らその後の学習をよりよ</p>
--

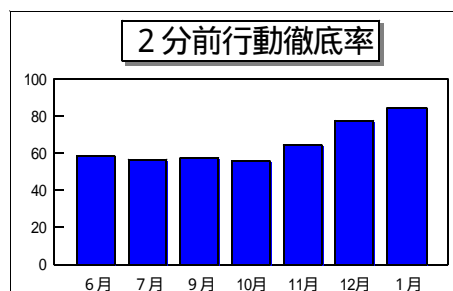
- いものにしていくきっかけとなっている。
- 2 態度づくり研究部の取組について
 下の表は、態度づくり「学び方名人への道」の1年生の自己評価結果である「学び方名人への道」で4つの観点「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」に関して生徒達が毎月自己評価を行っている。評価基準は「4 = 良くできる」「3 = できる」「2 = あまりできない」「1 = できない」の4段階である。下グラフの縦軸は「4 = 良くできる」を最高値として示している。



どの観点においても7月から12月にかけて若干ではあるが向上傾向にある。

右に示したグラフは、毎月の第1週目の2分前行動徹底率(%)である。始業前着席と授業準備ができていた割合である。未着席者や学習用具の忘れ物が一人でもいたら不徹底となる。

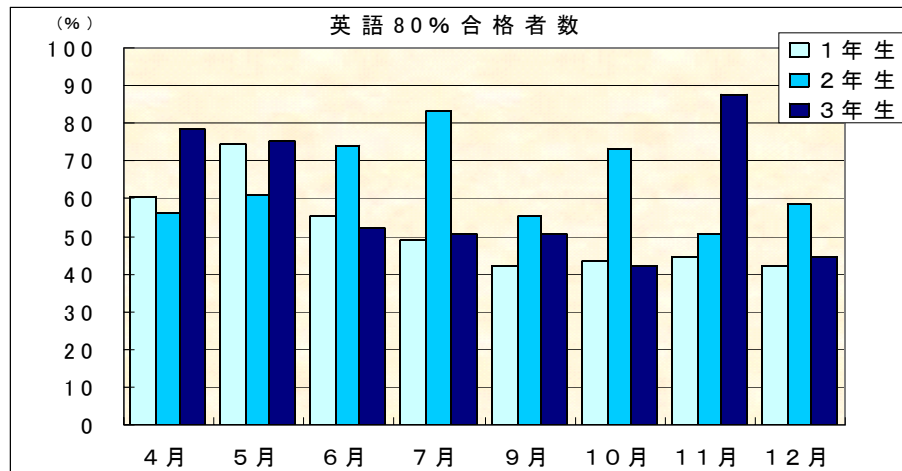
1学期から2学期前半まではほぼ横ばいであったが、継続した指導が功を奏したのか、11月から1月にかけて向上傾向にある。100%の徹底を目指して更に指導の継続が必要である。



- 3 家庭・地域との連携研究部の取組について
 地域との連携・協力をもとにした総合的な学習を進めることで、講話や体験学習などの貴重な体験をすることができ、生徒はより深い学習を進めることができた。また、各事業所などには保護者の方もおられ、学校外でも生徒が安心して活動することができた。地域から子どもたちの様子を学校に伝えていただくことで、更に個に応じた指導を学校でも進めることにつながることができた。

2. 今後の課題

- 1 授業研究部の取組について
 (1) 読み・書き・計算・英単語力の定着を図る「幸の国テスト」の取組
 下のグラフは、英語の幸の国テストにおける、得点率80%以上の生徒を割合で示したものである。夏休み明けの9月に数値が下がり、2学期は全体的に数値が低い。生徒の意識の低下や、学校行事への取組に追われたためだと考えられる。安定した結果を目指すための方策が必要である。
 さらに、ここにはデータを示していないが、今年度は再テストの時間が保障されたことで、生徒がその時間をあてにするため、第1回目での満点合格者数が昨年度より低下してきた問題点もある。



(2) 教科の基礎・基本の確実な取得を図るための取組

習熟度別少人数のコース分けの時点で、生徒の希望数に偏りが生じた場合は人数調整が必要となる。そのときの生徒への対応のあり方を考えていかなければならない。

少人数指導やTTによる指導は、たいへん有効な指導法ではあるが、授業時数の関係上、授業者どうしの打合せの時間が確保しにくい。打ち合わせがうまくいかないと、教師どうしでまとめ方や考え方にずれが生じてくる場合があるので、確実な時間の確保が必要である。

2 態度づくり研究部の取組について

「話すこと」のうち「理由をつけて話す」が更に指導を要する状況である。

3 家庭・地域との連携研究部の取組について

右表は、2学期における2年生と3年生の家庭学習時間を示したものである。「毎日する」が、少し増えてきたが、全体的には約5割しかいない。ここには塾での学習や、宿題にあてる時間も含まれているので、とても低い数値である。家庭での自学自習態度の育成が急務である。

単位 (%)	殆どしない	時々する	毎日する
9月	8.8	38.4	52.8
10月	7.8	47.6	44.5
11月	6.7	33.6	59.6
12月	3.2	33.6	63.2

学力把握のための学校としての取組

* 生徒の学習状況の変容を捉えるために、定期的に行っている各種調査などについて、調査の目的、実施内容、時期等を記すこと。

- 1 読み・書き・計算・英単語力の定着状況を図る「幸の国テスト」を毎週(木曜日)実施。
- 2 各教科の基礎・基本の定着状況を図る定期テストを年4回。
- 3 各教科の1年間の学力定着状況を図るために、熊本県教育課程定着状況調査を12月に、標準学力検査を3月に、各1回ずつ実施。
- 4 中学3カ年分の学力定着状況を図るために、県共通テストを3年生時に2回(9月、11月)に実施。
- 5 学習態度の取組状況を図るために、態度づくりアンケートを毎月実施。
- 6 家庭における自学自習状況を図るために、家庭学習状況調査を每学期1回。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- * フロンティアスクール中間発表会(2月13日)
- * 町教育研究所の実践報告会(2月13日)
- * 学力向上鹿本地区協議会での実践発表
- * 各種研修会での実践発表
- * 来年度、フロンティアスクール研究発表会を秋に実施予定

など

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無